Title	国土と地方の問題
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.3 (1941. 3) ,p.297(35)- 326(64)
JaLC DOI	10.14991/001.19410301-0035
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410301-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

國土と地方の問題

奥井復太郎

國土計畫は一國土の地方的編制に外ならぬ。其れ故、國土計畫論にあつては「地方」觀念と「地方計畫」とが可なり重要な課題として登場して来る。そこで私は一地方又は各地方がどのやうに一國土又は經濟の全編成内に組み入れられるものであるかを茲に考へて見たいと思ふ。

最も簡單に考へるならば一地方又は各地方は各々其の特質に據つて全國的に編成せられる筈である。北海道地方には其の地方獨特の特質があり、それを以つて日本經濟の全國的編制に参加して来る。朝鮮及び臺灣も亦、然かりであらう。内地の諸地方、之れと行方を異にするものでは無い。併しこゝに再考を要する點がある。其れは是等各地方の特質が決して其の編成過程に於いて絶對的のもので無いと云ふ點である。今假りに此の特質を廣い意味での資源と考へよう。すると一地方又は各地方の資源の意味は決して絶對的では無いと云ひ度い。

元來、「地方」なる觀念は「全國」なる觀念に對してのみはじめて考へ得るものであつて、東北地方と云ふ時、日本

内地或ひは全日本の「全國」的意味に關係せしめて東北地方と考へられるのである。地方は何處までも部分觀念であつて此の意味では「中央」なる部分觀念に對應するものである。故に地方資源といひ、地方經濟といふ場合、いづれも全國、全土の經濟體制に規定せられて來ての觀念でなければならぬ。換言すれば其れは一つの社會・經濟的な歴史の意味に於いての資源であり、經濟である。故に一國土は常に全國的必要(之れが中央の要望となつて現はれる)の要請に對して應へる各地方の持つ特質に就いて是等諸地方を一定の型に編制するといふ形態で現はれて來る。

此の考方は今日盛んに云はれる國土計畫の理論及び計畫に就いては相當重要な點だと思はれる。何故かと云へば、以上の考方からして、今日の國土計畫の下に諸地方が編制せらるゝ時、當然、今日の經濟體制の裡に、各國民經濟が要望する方向に應へて地方資源又は地方經濟の特質が考へられねばならぬからである。

既に國土計畫の傾向に就き開發的國土計畫と再編成的國土計畫といふ。或ひは國土計畫の性格を分散主義體系に結びつけようとする。開發、殊に特殊なる地方開發を目標とするが如き國土計畫に在りては、各地方が其の有する特殊資源の全價値に就いて之れに應じようとする。或る意味に於いては大規模な、植民地的開發手法が、爲めに要請せられるかも知れない。反之地方經濟の再編成の場合には植民地的編成は決して要望せられない。否むしろ各地方が植民地的編成裡にあつた今迄の體制に就いて、其の行方を改めんとする修正的手法として國土計畫が登場して來るとも云ふ可きである。即ち各地方を植民地化するが如き中央集權に對して寧ろ地方分散的傾向として要請せられるのである。従つて分散主義體系としての國土計畫論は其の性格上、國土及び地方再編成を眼目としてゐるに外

ならぬ。

勿論、地方開發の國土計畫論にしても、今日に於いては決して單純な植民地的採取それ自體を目的としてゐるものではない。殊に電力開發の如きに到つては其の地方に産業及び文化の多角的發展を可能ならしめ様とする事を企圖してゐる。故に地方開發と稱しても一概に其の地方に於ける特殊資源を悉く中央に吸引して了ふ事を意味しない。むしろ逆に其の地方に於いて其等資源の利用をも併て行ふ可き計畫すら要望されてゐる。

併し地方資源又は地方經濟に對する中央の要求は決して一樣でない。勿論此の地方對中央の關係は常に相對的であるが故に中央のみが此の關係を一方的に決定する事を得るものではない。産業、殊に工業の地方的分布は國民經濟の變遷に應じて變化するものであるが、工業の移動の原因は、勿論自然資源の枯渴に基因する場合も少くないが、今迄中央地方に立地してゐた工業が遠く原料生産地等に移動したといふが如き場合には、是等原料生産地の社會・經濟的状況が嘗つては製造工業の立地を妨げてゐたが、其の後の地方發展によつてその成立を可能ならしめるに到つたといふ變化に基因するものであらう。即ち或る地方は一定の時代に於いては農業又は原始的な抽出産業の成立は許すが、それ以外の若干複雑又は高級なる工業乃至は産業の成立を可能ならしめない。従つて各々の産業又は工業が或る地方で行はれ得るには一定の地方條件の成熟が必要である。少しく奇矯な表現かも知れないが、若し許されるならば、或る種の工業が或る地方で行はれるといふ事に就いては或る種の文化程度を前提とするといふ理である。

かう云ふ意味で工業移動や所謂地方主義の主張が米國で注意されてゐるが、アメリカ國內の地方植民地（之れも或る地方主義者の命名である）が、一方には忌憚なき植民地的採取に就いての自然資源の荒廢の危機、他方には地方經濟及び文化の向上との両面から見て所謂ナン・ナルプランニングの觀念の對象となつたと見る事は必ずしも失當ではあるまい。つまり此の意味では或る地方が植民地的に意義づけられた事から發展して地方經濟の厚生といふ状態に到る現象と見る事が出来ると共に、一地方又は各地方の全體の體制に編成されてゐる體様は時代的に異なるのが當然であり、斯くの如くして地方資源及び地方經濟の意義は、全國的經濟組織の要請に相俟つて之に應へんとする相對的、従つて社會・經濟的乃至は政治的なのだと云へるのである。

今、是等の現象を説明する二、三の例を擧げて見たいと思ふ。第一には或る土地が「地方」となる以前から「地方化」するに到る迄の過程に就いて其の過程の初期は如何なる状態にあるかを研究してみたい。勿論、茲で問題になる土地は母體社會に何等關係の無い土地を指すものではない。唯、植民又は開拓者の場合に見る様に第一の時期には母體社會の一部が分離して（比較的の意味に於いて）あるが（此の土地及び其の社會と接觸する状態を生ずるが、かゝる時代の一例を次に掲げる。それはアメリカ植民に於ける、殊に邊疆に於ける白人とアメリカ・インディアンの接觸に就いての一つの文化的現象である。

一

Clark Wissler が典型的な Culture Complex としつ土着の Maize Culture 殊に玉蜀黍栽培をめぐる生活型態が

アメリカ土人から白人に傳習され且又其の儘殘積して來た過程及び理由に就いて説明する所は次の如くである。

玉蜀黍は大西洋岸メキシコ灣沿岸の土人の間に耕作されてゐたが舊大陸との交通が開かれると共に歐洲にも移植され多大の普及を見るに到たが、亞米利加印度人の生活文化を見ると玉蜀黍栽培に結びついてゐるものが頗る多し。

(一) 玉蜀黍栽培。之れは土壤の用意、播種、作物の保育、穂の收穫、種子の保存等の手續及び過程を含むが、何れも一定の手續と順序とを以つて行はれ、之れ自體が一つの Complex であるが、メイズ・カルチャ・コムプレックスの中心事象を構成してゐる。

(二) 玉蜀黍の供食過程。玉蜀黍は生の儘食用に供し、或ひは剥皮し挽粉にして用ふるが、いづれも各々種々の形式をとる。玉蜀黍に莢、南瓜又は肉類を混用する料理法があつて一定の調理法に従つてなされる。

(三) 玉蜀黍に結着いてゐる事が明確なる無数の儀式や社會的慣例等。

此のメイズ・コムプレックスはインディアン部落のいづれを通じても大體共通同型である所に興味がある。メキシコ灣から St. Lawrence までの間に獨立無連絡で雑多のインディアン文化が存在するにも拘らず、メイズ・コムプレックスだけは殆ど同型である。此の同型性の説明をウキスラアは次の様に云つてゐる。

『一文化の特徴に斯くの如き一律性の在る事を説明するに當つて、之れは一つの土地から完全な型の儘で普及したと考へねば説明が困難である。若しさうだとすれば各種族はメイズを利用する手段方法を工夫する必要を免かれ、従つて何等重要な獨創的寄與を自からはしない事になる。』

併し更に興味ある事實は此のメイズ・カルチュアが白人に傳つた時の形體であつて、白人は土人同様、之れを盛土型に栽培してゐる。

『吾が農夫は以前、或ひは屢々今日でもさうであるが、盛り上げた土に玉蜀黍を播種してゐた。之れが一般にインディアンの遺方で、三呎位の正規の間隔を置いて四粒乃至五粒を一つ場所に落し入れる。全く今日の玉蜀黍農場とそつくりである。耕作に當つては、インディアンは生へてゐる莖の周圍に土を掘り起してやる。之れ又機械耕作の原理である。剥皮に當つては吾が農夫は剥皮ピンを用ひるが、之れは今日でこそ鐵製であれ、つひ先頃までは骨又は木製で、今日残存せる東部インディアンの間に使用されてゐるものに正しく同じである。玉蜀黍の穂を乾燥させたり又は種子として保存したりするのに屢々そのぶら下つた外皮を編み合わせるが、之れは典型的にインディアンの風である。彼等は玉蜀黍桶を用ひ、内味を乾燥させて置く爲め或ひは齧齒動物の害を防ぐ爲めに柱の上にあけておく。此の桶の型で上部が底部よりも大きい型のものが同じく南部インディアンによつても使用されてゐた。』

其の外、種子吟味法、温湯發芽促進法等も同一であり、更に調理法が同似であるのみならず玉蜀黍を用ひた料理の名稱にはインディアン風の残つてゐるものもある。玉蜀黍の穀皮で作つた敷物は或る地方の家庭では今なほ用ひられてゐるが、之れを調べて見ると博物館に陳列されてゐるイロクォイ族の實物に其の技法が全く同じである。

白人がインディアンに代つて行つた改新の内最も重要なものは水車の代りにモーターを用ひた事である。更に後になると種々の機械が植付けや收穫に用ひられて來るが、之れが單なる使用以外の何物でもない事は注目し値する。

『是等の機械は同じ昔風の遺方を一層便利に行ふといふ丈の機械應用に過ぎない。開拓者時代には白人農夫が明かに、メイズ・カルチュア・コムプレックスを全體的に取り入れておつたので、儀式や社交的な要素は別であつたが、それでも幾らか是等の點でも珍らしい同似を吾々は見出す。剥皮寄合と云へば吾々の先代の時代では大きな社會行事の一つであつたが、之れは、はつきりと昔のインディアンの風習と並行してゐる。吾々の祖先の家庭的な歴史をもつと知るならば、疑もなく彼等の作物の成長を祈る儀式や迷信的な行事が可なり驚く可き程浸透してゐる事を發見するであらう。』

斯くの如くして植民者は玉蜀黍をめぐつてその生活文化を全面的に取り入れたと云ふ事が出来る。彼等は土人から單に玉蜀黍の種子丈けを借りて自分等丈けの農法に一致させた栽培をするとか自分等独自の玉蜀黍風を發展させるとかいふ事は全然無かつたのである。事實、彼等は機械應用の發達、及び更に近來になつての科學的研究による農業の合理化といふ點を除いては、メイズ文化に對して獨創性を主張する何ものも持たないのである。

反之、舊大陸に普及した玉蜀黍栽培は其の運命を全然異にしてゐる。従つて此の比較から次の様に考へる事が出来る。一植物丈けが歐羅巴文化の中に移植された結果、其の新種に對しての新しい實驗が必要であつた。少くとも他の植物栽培の型に其の栽培を適合させる必要があつた。所が、アメリカ移民は自分達自身が新しい文化の眞中に進出してつたのである。其處では新しく發明するよりも從來のメイズ・カルチュアを其の儘、受納する方がより容易であつた。否さうせざるを得なかつたのである。

「故に一方の場合には、新しい物又は孤立せる觀念が遙かに引き離されて運ばれて行き、未知の文化集團の内に落し入れられる。も一方の場合には集團それ自體が未知のカルチャーの中に入れられる、或ひは單に之れと接觸せしめられる様になる。後者の場合には、全コムプレックスが全體として其の儘取り入れられる。前者の場合には新しい特徴が獨創的に發展せしめられるか或ひは單純に或る既存の型に適合せしめられるかである。」

之れと同一の現象は玉蜀黍栽培以外にも決して少くない。要するに此の現象は「一つのカルチャー・コムプレックスが一定の土地に對する適合として一旦發達して一旦且つ相當に良好な作用を持つと、それは其の地方に固着するの傾向を示し、血及び言語に於いて完全な變化があつても、其れを超して自ら留まり行はれようとするものである」事を示してゐる。

Wisler は更に、斯くの如く特定の文化體が或程度まで土地に定着し、人間の社會集團の去來にかゝりを持たぬ様に見える所から、其の間に何等かの超人間的力の作用の存在するを重要視するものゝ如くである(註)。併し茲で一應彼の所論から離れて、此の問題の意義に就いて論じて見たいと思ふ。

(註) Clark Wisler: Aboriginal Maize Culture as a Typical Culture Complex. American Journal of Sociology. vol. xxi-5, 1916 March.

三

以上の土民文化が白人社會に傳承された事に就いては、大きな白人社會(母體)から分離した一小集團が一時、分

離したまゝで異郷文化の内に置かれた爲めであると説明する事が出来る。故に此の分離した小集團が母體社會との間に充分なる連絡をとり、兩者間の交通、社會關係が緊密になれば異郷文化は幾分稀薄化して來るであらう。之れと類似現象を吾々の身邊で觀察する事が出来るが、大都市郊外現象が正しく之れに妥當する。郊外發展の型に二種あつて、一つは從來の市街地の連続的擴大、も一つは飛地的發展で、前者の場合は兎に角、後者の場合には、其の發展は土地に古くから然かる可き生活形式の中心點(小町村)のある事を前提としてゐる。従つて第一期の郊外移住者は先づ其の土地の生活型態に適應する必要がある。つまり一部分は其の生活を田舎化する必要がある。併し此の都市發展の傾向が持續し或ひは更に擴大する限りに於いて、かくの如き田舎社會が都會的機構へと移らざるを得ない變質的過程を生ずる。(拙著「現代大都市論」第三章第五・六節「郊外地」参照)

かう云ふ意味で殆んど東京化した鎌倉市に於いて近來、郷土文化復活の機運のあるのは可なり面白い現象と云はざるを得ない。即ち相當以前から中絶して了つてゐた「あめや踊」なるものが先頃土地同好者の手で復活されつゝあるが、純然たる東京化した鎌倉に此の土着文化の復活があるといふ事情は確かに興味ある觀察對象たるを失はない。單色のな大都市主義に對する反動か、或ひは大都市々民自體の内的寂寥への慰藉としての要求か、いつれにせよ地方文化論の近來極めて盛んなると共に興味ある課題である。

アメリカ邊疆地に於けるメイズ・カルチャーの問題はなほ別の問題を指示してゐる。ある一つの人間(社會)の製作物はそれと共に社會上、生活上に一つの型及び約束を伴ふと云ふ點である。之れは所謂 Culture Complex の理論であるが、例へば自動車交通の普及は道路、交通機關、服裝及び生活規律等に就いて自動車本來の本質に適合した

一聯の複合的なカルチュアを持つてゐる。そして自動車の發明乃至は輸入と共に此のカルチュアも發生又は招來せられる。此の問題は既に本誌で一部論じた所もあるので茲では詳しく論及しないが（本誌第三三卷第三號『漁業孤村の調査』参照）要之、一定の條件の下にあつては前述の玉蜀黍栽培或ひは稻の水田耕作等に就いては茲に云ふカルチュア・コムプレックスの現象が當然發生して來ると云ふのが普通のやうである。

所でメイズ・カルチュアの體制が破れる事は、大きな世界（母體社會）への關聯が強化した場合に生ずるのであつて此の意味で交通組織の完備は其の土地を完全なる「地方化」する最も代表的な表現である。昔、上海に於いて外國商館の手で始めて鐵道が敷かれた時、上海官憲は眞向から之れに反對した。そして之れが紛争化した時、鐵道建設を廻つて色々の論議が行はれた。鐵道こそ西歐的考方が支那にも行はねばならぬと云ふ不可避的な事實を支那人に印象づける最も良き手段であるといふ議論は優越者側の當然なる主張であらう。併し其の反面、支那人自體は蒸汽機關そのものに恐怖を懐くものでなく經濟的侵略即ち「印度の運命」といふ考方が愛國的な支那人の腦裏を往來してゐたといふ事も正しい解釋である。更に鐵道開設が支那労働大衆に及ぼすであらう影響を考ふれば、支那上海當局が鐵道敷設に反對する理由は、嫌忌とか恐怖とかの以外に在る事を認めなくてはならぬ。（Ernest O. Hauser: Shanghai: City for Sale.）

斯くの如くにして交通は中央文化の支配を確立して行く手段であり、之れを通じて地方及び地方經濟は全國的經濟體系裡に編入されて來る。再び此の問題をアメリカの地方經濟に就いて觀察してみよう。

四

Inland Empire Region とはシヤトル市の奥地で行政的にはワシントン州が大半であるが地理的には東はロッキン山脈、西はカスケイド山脈に境され、南はオレゴン州のブルー山脈によつて圍まれ、北はブリティッシュ・コロンビアと合衆國との國境に限られ、ほど七萬二千平方哩の地域である。此の地方の經濟機構が如何にあるかといふ點は地方經濟の研究者にとつて興味深い研究の一題目たるを免れない。

此の地方の地理的條件は同地方の開発が決して容易でなかつた事を示すであらう。此の地方に白人が足を踏み入れたのは一八〇八年頃で毛皮獸捕獲業者であつたと云はれる。従つて恒久的な定住關係を成立せしめるには到つてゐない。其の意義は「此の領域に白人の注意を惹かしめ探險を刺戟した點に於いて重要性があり、他の要因によつて其の大詰を見るに到つた運動に先づ發足を與へた所に其の意義があつた。」寧ろ毛皮獸捕獲と他の産業的開發との間には直接的に利害關係の衝突がある時まで云つて差支なかつたであらう。事實、毛皮業は邊疆地方の開発によつて益々奥地に後退せざるを得なかつたから。毛皮獸捕獲に次いで現はれたのは鑛山業者であるが、之れは斯の有名な黄金狂時代を伴つた事に前者の場合とは全く異つた現象となつた。即ち砂金熱に浮かされて無數の冒險者が這り込んだが、茲に所謂ブーム・タウンの簇生を見たが、元々確實性を缺いた黄金熱が架空の浮雲として消滅し去るや、移住者も共に四散して了つてゐる。「都市が金が發見された土地、或ひはさうした土地と物資供給基地とを結ぐ道路の要衝に、一時は急速に出現した。併し大部分は出來上るのが早かつた同様に頗る急激に忘却されて了つた。……」

町の形體的骨組丈けが残つてゐるが、生命は無くなつて了つてゐた。丁度上潮に乗せられて押し上げられた古い端艇が潮の去つた跡に取り残された光景を懐かしめる。』

併し黄金狂現象と異つて土地の礦物資源を恒久的に開發し様とする努力は全く異つた重要な意義を持つてゐる。是等の産物にはマンガン、鑛石をはじめ、金銀銅錫鉛等があり二十年代後半の平均年産額は二千七百萬弗と云はれる。唯、その人口包有量に就いては農業、木材に及ばず農業の二九・七%、木材業の四・〇%に對して鑛業人口は三・二%と計算されてゐる。

是等物資の需要がいつれも地方内部のものでない事は明白である。つまり此の地方は是等の資源を通じて大きな經濟領域の一部と發展しつゝある事を示す。

『是等鑛山の經營及び擴張は其の土地に巨大なる人口集積を生ぜしめ、爲めに經濟物資に對する需要が激増した。機械、建築用材、食物其の他の貨物の市場がつかられ、著しく特殊化の傾向が起り、直接の鑛業中心地と是等必要特資を供給する各地方との間に密接な依存關係が生じて來た。斯くの如くして鑛山は財貨に對する需要を喚起したのみならず、後背地の發展に對する富を供出した。』Spokane 市が其の中心地であるが近來鑛山そのもの持つ意義は多少共弱くなつた様である。蓋し、鑛山によつて供出された富は多數の資源開發を増大するに當つての主要な要因であつたが、是等諸資源の價値が今や其の發展に資した鑛山のそれを覆ふに到つたからである。

川に砂金、地中に鑛物を藏してゐた山嶽地方は木材及び林製品に於いて又、重要な意義を持つてゐる。數百萬弗

に及ぶ其の産物は此の地方丈けでなく全米諸地方に對しての供給を確保してをり、全國産額の三六%を保持してゐると云はれる。而して地元内の消費は二六%で残餘は外部に搬出されるが、ミッドウェスト中西部地方及びロッキー山脈—ミシシッピ—川中間の諸州との取引が最も多いと云はれてゐる。殊に米國産業史に於ける森林業製林業の發展は地方經濟史の動向を示す最も興味あるもので、其の中心地を年代的にニューイングランド時代、レイク・ステイツ大湖諸州時代、太平洋西北部(四州)時代とし其處に一つの西進運動の過程が窺はれると共に、是等の諸地方が全米經濟機構内に編入されて來る過程をも物語つてゐる。

森林・木材業が地方經濟内に如何なる編成を示すかは又、一つの興味ある觀察點である。彼等の聚落は森林地に接近し、之れに對して製材所を中心とする町が出來たが地内の交通不便の理由を以つて是等の聚落體系が全體的に統合する事は無かつた。之れ、同じくワシントン州の西部、海岸寄りの山地々方である Puget Sound Region と全然趣を異にする所以で、此の地方では入江に沿ふて水運の便を利用して木材業聚落が集中してゐるに反し、インランド・エンパイア地方に於いては聚落が頗る散在してゐた。併し、交通施設の改善と相俟つて散在的小部落の體制に漸く變化を生じ、聚落結集の状態を示すに到つた。即ち製材所を中心としての聚落形態は之れを取巻いて材木を供給する伐出人のキャンプを集合せしめる型となつた。中心の製材所の大小(聚落の大小)は伐出方法の如何によつて決定するもので役獸や運搬車を用ひて搬出する場合と鐵道を利用する場合とは製材地聚落の大小に相違を來さしめる事になる。

森林産業と聚落恒久性の關係に就いては、原始林の面積密度、材木の需要、資源開發の技術技能の發達等が之れを決定する要因となるものであるが、鑛山聚落の場合と共に資源の消盡を俟つて是等聚落も消滅して了ふのが原則であるが、茲に此の場合の特色とも見る可きものは、森林伐採の後も、周囲の地味氣候等が許す限りに於いては木材伐採後も栽培其の他の農業に適する土地を残す故に、木材業聚落が農業(狹義)聚落に變化する限り、資源の消盡した鑛山聚落の場合程著しい衰微を招く事は無い。併しかゝる産業を基底としては聚落の興亡が頗る著しいのが原則で、森林資源の無くなつた時、木材需要の減退した時等は直ちに是等聚落住民に過剰を生ぜしめ變動を誘起する事となる。併し同時に製材業の性質として季節的労働移動による特異の現象がある。伐出季節になると廣い地域に亘つて到る處にキャンプが出来るが、其の季節が終ると労働者は職を失つて附近の町に流れ込む。是等の附近の都市は季節労働者の貯水池である。

インランド・エムパイア地方は地方經濟發展の段階に於いても、なほ一、二段進んでゐる。前述した人口構成にも示される様に、森林業の保有人口は決して多くない。寧ろ此の地方は更に一段と進んで農業段階に入つたと見る可きであらう。

農業は此の地方經濟上、最も重要な意義を持つてゐる。地理・地勢的に多種多様の農業活動が可能である。牧畜に良く、穀栽によく、林檎栽培に適し製酪家畜にも適すと云ふ點で農業は多種多様に分化し且つ商業的農産物經營が盛大である。此の事實は此の地方を大きな經濟に合成するを可能ならしめるものであつて、「全地域に亘つて散

在する小規模の特殊化された地域に生産される貨物の交易が中心の合成點として多くの市場を發達せしめてゐる。永い間交通施設が Spokane を物資の集散地として發達せしめてゐた。事實此の地方の歴史は Spokane が著しく特殊化した地域を澤山に持つ廣大な後背地に媚びる メトロポリタン・エムパイア 大都市社會として發達するに到つた記録である。而して之れと同時に看逃す可からざる點は、斯くの如き地方内部の合成、それが中心都市の發達となつて示されてゐるのであるが、それすらが此の經濟地方の全國的編成の裡に規定されてゐるといふ事實である。つまり Spokane 市一つをとつて見ると之れがインランド・エムパイア地方の經濟と米國全土の經濟との二面によつて規定されてゐると云ふ事である。

斯くの如き經過を些細に觀察するに當つては、生産に供せらるゝ土地利用の方法、各地域の分布、市場組織に重要な意義を持つ或る種産物の集中狀況とが注意を要する點となる。例へば小麦栽培に就いて見れば、農業特殊化の主位を占めるものは小麦耕作であつて一八六四年此の地で小麦栽培の可能性が認められて以來、今迄の牧草地が變じて小麦畑となり今日では鑛業よりも人口吸引のより、強力な魅力となつてゐる。此の小麦栽培の興隆に伴つた地内の經濟・社會的變化は何んであつたか。

小麦耕作が機械によらず、高々役獸によつてゐた時代、即ち一九一〇年頃までは、此の地方の農家の耕作面積は八〇一・一六〇エイカアであつた。農業労働者を雇備すれば、此の面積を幾分増加し得るが、此の地方の標準農場(一九一〇年頃)は二六〇一・四九九エイカアが普通であり、一般には三二〇エイカアの農場(之れを half-section farm

と云ふ、従つて一六〇エイカア農場は quarter section 八〇エイカアは half-quarter section farm といふ事になる) が最も多く經營された。農業労働者を置く場合季節労働者として春秋の二期に不定労働者に對する需要が多かつた。従つて是等の不定移動労働者は農閑期には他の職業を求め或ひは附近の都市に流入して待機する必要があつた。かゝる浮動的な人口が土地の社會生活に積極的貢獻をする事は不可能で、徒らに労働爭議其の他紛争の種を播くに過ぎなかつた。

然かるに農場トラクター、自動車トラック、コムバイン等が紹介されるに及んで今迄の事情は一變して了つた。是等不定労働者の雇傭が不必要になつて、彼等の助力を俟たないで經營し得る一家農場の面積が激大した。農業労働者丈けが放逐されたので無くて農家の子女自身が不用となり農場を離れなければならなくなつた。所謂、離村の問題が起つた。従來、農家の子女は農家經營の必要なる助力者補佐者であると共に農家經營を將來に繼ぐ役目を果したものである。従つて従來の農場は動もすると益々小分されて了ふ傾があり、八〇エイカア持ち、クォーター・セクション畑と云ふ様になつたが、村に生れた者は依然、村の構成員として不可分の關係にあつた。新しい時代と共に彼等子女の存在は不要となつた。農場の分割は不利である一方、新しい農場の擴張、獲得は困難であつた爲めに、子女の村に滞在する餘地は全然無くなつて了つた。

機械耕作による農場の大規模化に就いては一九一〇年より一九三〇年の間に一〇〇一七四エイカア、二六〇一四九九エイカア級の農場が減少し五〇〇エイカア以上のものが急増してゐる事によつて明白である。一番打撃を受けたのは一六〇エイカア畑で生計農場として農業及び農村の脊柱を爲してゐたもの、上に深甚なる打撃が下つたのである。小農合併の結果先づ合併せられた農家は土地を離れなければならなくなつたが、土地に留まる可き方法は無かつた。此の現象が少麥農地の農村人口減少となつて示された。

「農夫が土地から動くといふ事實は、萬屋マンロウや村並びに田舎の社會・經濟的施設の組成者を失ふ事を意味する。是等の農夫の家族が土地から去つて了ふので、初期の移住以來、全地域に普ねく散在してゐた「教室」學校の校舍も荒廢して了つてゐたり、或ひは農場建物に利用されてゐる。四辻の教會も同様な運命に逢つてゐる。勿論、交通要因が是等の變化に及ぼした影響は看逃す事が出来ぬが主要な要因となるものは農村人口の減退である。」

然かるに此の地方には、他方、灌漑による改良農地が在る。其の面積が一九一九年には三十五萬エイカアと云はれてゐるが二九年には五十萬エイカアに達してゐる。茲に興味ある問題は、是等改良農場では一九〇九年の平均面積が僅か四三エイカア、それが一九二九年には約三〇エイカアに減少してゐる點である。改良農場が大部分を占める或る地方では農場の代表的大きは一〇一九エイカアと云はれ、大農場の専ら行はれる地方の普通農場に比較すると、此の方は五〇〇一〇〇エイカアと云ふ状態である。茲に人口分布と農法との關係が頗る緊密である事が明瞭になつて来る。改良農場の主な地方では人口が増加し、村が出来、町が出来、其の社會も頗る安定性に富み、小作人比率も亦、遙かに少ないと云はれてゐる。

併し一方小麥栽培が大農的に五〇〇乃至一〇〇〇エイカアの農地を必要とするに對し改良農場が五〇乃至六〇エ

イカテ未滿の農地で差支ないと云ふ事は、明かに是等改良農地の利用が穀類以外のものに依據してゐる事實を裏書してゐる筈である。寔に改良農場の作物は果實、野菜及び牧草等であり、穀物の栽培は極めて少ない。野菜栽培地は市場關係に基いて都市の附近に集中してゐるのは當然である。果實、殊に林檎は其の大宗である。

林檎は其の性質上當然商業向産物であるが、全國産額の四分の一を産すると云はれ、國內有数の産地である。販賣向林檎は大部分新鮮果として賣られ、其の貯藏の期間が極めて制限せられてゐる故に、他の地方と重要な市場連絡が無ければ其の生産は成立しない。林檎は其の産地から自動車を以つて運ばれ各地方の消費者に直接渡される。併し鐵道輸送の分も決して尠少では無く、其の仕向地は世界に及んでゐる。所が林檎の生産に就いては頗る注目すべき結果が附隨してゐる。つまり林檎の栽培販賣は大市場中心を形成せしめる特長を持つてゐる。穀類の様に直接農場から市場に出す事が出来ないで、一應、中間的操作を必要とする。即ち類選、等級、包装等の手続きが市場向けの準備として必要であるに連れて、此の爲めに特殊の技能を必要とするが故に一定の労働者が必要となつて来る。又是等の手續操作に用ふる機械も個々の農場で使用するには高價すぎる故に、結果、各農場の收穫物は一應鐵道路線の一ヶ所に集められ其處で大量的に準備される。又仕向地に發送せらるゝ以前、長期又は短期貯藏されねばならぬ故、必要に應じ得る様に搬出準備、貯藏、配給といふ三過程に對して特殊の中心を生ぜしむる傾向を伴つた。是等の工夫、及び林檎栽培法の改良等によつて其の季節的性質が幾分修正し得られるの效果を示してゐる。斯くの如く灌溉による改良農場の利用法は特殊のあり、又他の農業經營と異つて加工勞力施設を必要とするも

のである。此の改良事業の將來は相當有望で此の地方に五十萬の人口を吸引し得ると見込まれてゐる。一九三四年同地方の一ダム築造に際してルーズヴェルト大統領の挨拶に『此の地方は可なり荒蕪の様に見受けられるが聽ては多くの人々によつて充たされるであらう、それも此の州内の人々ばかりでなく、全米各州からの極めて多くの家族によつて充たされるであらうと信する』と述べた。〔Economic Resources in relation to Regional Growth and Integration in the Inland Empire Region, by Robert R. Martin (Social Forces 17/3, 1939.) Integration in the Inland Empire Region of the Pacific Northwest, by R. R. Martin (Social Forces 17/1 1938)〕併しインランド・エムパイア地方の地方經濟史の發展は決して茲に終つてない。米國全土に就いて近來、工業立地の移動が発生しつつある如くであるが、此の地方の工業化が既に要望されてゐるのである。之れを記録によつて紹介してみよう。(American Planning and Civic Annual, 1940. Industrial Migration, discussion by P. Heberton, pp. 44-47)

米國に於ける工業移動が問題として取上げられるに關聯して前述の地方、即ちインランド・エムパイア地方に於ける産業構成に就いて一關係者は次の様に考へてゐる。
つまり同地方が關する限り、近來の所、所謂工業の移動は無い。『全體として見ると工業は人間が移動する程には移動しない。北西部に於いて吾々は dust bowl areas からの人間の流入に直面してゐる。是等の人々は資本を殆ど持つてゐない。従つて州民の間に既に起つてゐる失業問題に負荷するだけである。不幸にも工業が彼等と一緒に移

動して來ない。吾々はもつと工業が欲しい。それも特に第二次的製造工業が望ましい。吾々の經濟は餘りにも多く原料又は半加工品の輸出に依存し過ぎてゐる。』

つまり地方經濟の發展の過程及び段階に於いて、一種の植民地構成が既に經過せんとしてゐる状態にあつては此の州計畫局關係者の主張する様に工業編成に就いての更新といふ事が問題とされるのである。此の地方の原料又は半加工品と云へば前述の如く製材及び農産物、更に後者の加工罐詰業であるが、製材業は既に其の頂點を過ぎ、今日では製紙パルプ工業及び罐詰製品の興隆によつて全體としての工業的價値を維持してゐるに過ぎない。従つて、此の時に當つて男女衣服、靴、帽子、又は糖菓等の製造業、つまり第二次的製造業の多くが振つてゐない事が相對的には地方産業の編成に頗る打撃なのである。も一つの重大問題である、農業のみならず、前述の性質の工業に當然附隨する労働需要の季節性の問題も、同地方の産業編成が唯單に興隆する許りでなく其の組成が複雑多角的になつて來る、つまり第二次的製造業が發達して來て、是等相俟つて季節的労働需要を一段と大なる均衡に据へる事が出來る様になれば著しく改善せられるであらう。

然かも同地方の開發を更に進捗せしめ様とするならば、豊富なる水力電氣事業に注目する事が出來る（總計完成の豫想馬力數は五一八萬馬力と云はれる）、殊に低廉豊富なる動力開發は所謂、動的投資ダイナミックインベストメント又は戰略的投資と稱せられる可きものであつた。道路事業が自動車工業の、鐵道補助施設及び地方開拓獎勵が鐵道事業、惹いては製鋼業の發達を促した様に、電力事業の開發は電力利用を促進し電氣機具工業の振興に資する事となる。此の意味

で水力事業の遂行は動力源として各種産業にとつて好影響があるのみならず、電機工業の如き種目をも加へ得る事に非常な意味を含んでゐる。

同時に此の地方が産出する鑛石は之れ又、水力發電と結んで各種に利用せらる可きである。ワシントン州の東北部に發見せられるマグネサイト及びドロマイトの鑛層は相當良質を判定されてゐるので、茲にマグネシウム金屬の工業を興す可能性があり、又前にも誌したマンガ、クロム鐵鑛等はアルミニウム、マグネシウム及び鋼鐵製品に必要な純良度を持つたものと云はれる。又硫黄からの肥料製造にも多量の動力が使用されてゐる。

『斯くの如くして聯邦政府又は公私團體によつて行はれた動的投資と結んで是等の工業が興されるや北西部地方は均衡的經濟を樹立する豫想が出來る事になつた。同時に直接の市場に依存して繁昌する第二次的工業についても看逃してはならないし、工業の過大集セントラリゼーション中の反社會的影響を永らく無視する事も出來ない。』

要するにインランド・エムパイア地方が植民地經濟から自主的經濟地域に完成しようとする希望と努力とが茲に窺はれてゐる。

五

之れと同例の例を布哇經濟に就いて見る事が出來る。こゝに於いても布哇が獨立の經濟地域から漸次大經濟勢力圈内に編入されて、植民地化し、更に其れから轉じて地方經濟としての成熟期に入る過程が窺はれる。

布哇島嶼社會の經濟發展に就いては嘗て本誌に紹介したが(Andrew W. Lind: An Island Community, Ecological

Succession in Hawaii 1938、「三田學會雜誌」第三十三卷第二號「布哇—島嶼社會の生態的研究」(参照)其處で私が取り上げた問題は本稿に於いて論ぜんとする一經濟領域—地方と全經濟領域—世界又は國土との關係に外ならなかつた。故に前回の紹介文に多少重複する嫌もあるが、此の問題を再び此處に取り上げる事を許して貰ひたい。

布哇が白人文明に接觸する様になつたのは一七七八年キャプテン・クックの航海以後であるとされてゐるが、事實、布哇經濟の發展史に於いて重要な一時期と劃するものは一八五〇年以降のプランテーションに在ると云つて差支ない。クック以前の、或ひは其の發見直後の布哇は石器時代的な生活形態に在つて、「生計經濟の基礎に立つた原始的な封建制」の社會に過ぎなかつた。其れが今日に於いては資本主義經濟體制内にあつて完全に成熟した一つの地方となるに到つた發展の段階は安定—動搖—安定といふ一つの循環體系を示してゐる。或ひは靜態—動態—靜態の體系として示す事が出来るかも知れない。之れが常に一地方としては、それ自體の内部から動かないで外部又は外來の勢力に誘因を持つといふ事に重要な關係を示してゐる。布哇史は(一)一七七八年以前(白人接觸以前)、(二)航海者の避難休息所時代(一七七八—一八〇〇年)、(三)サンダルウッド採取時代(一八〇〇—一八二五年)、(四)開拓移住時代(一八二〇—一八五五年)、(五)農業發展時代(一八五〇—一九〇〇年)、(六)安定化時代(一九〇〇—一九三六年)に分かたれてゐるが、此の六時代期にあつても第五期を中心にして其の前期と後期との三つを正しく大別する事が出来る。何となれば第二期に航海者が屢々寄港したり、第三期に航海者が支那商人に對してサンダルウッドの輸出を行つたり、或ひは第四期の初期開拓者の侵入にしても、布哇社會の基底は、漸次變化を醸じつゝあつたと

は云へ、大體に於いて土民社會體制に置かれてゐた、併しプランテーション經營となると最早、土民社會の體制は許され難くなつて來た。之れが土地制度及び土民人口移住人口に最もよく表明されてゐる。「布哇の歴史は其の土地の内に書かれてゐる。過去百五十年間に土地の使用及び支配について生じた變化を適正に記述すれば住民の生活や活動を明かにする許りでなく、彼等が建設した諸制度、彼等が生活する社會等の型をも明かにするであらう。土地使用の變化は、經濟關係に上の世界網に於ける布哇の占める位置の移動を計るには少し抽象的な尺度ではあらうが、此の土地保有關係を推移しつゝ基礎として其の上に、布哇の政治的精神的秩序が建てられてゐるのである。」人口に就いても土民人口の安定期即ち布哇諸島の自然資源と土俗文化の適合期から、外國植民初期に當つての土民人口の急激なる衰亡(一七八〇—一八六〇年)、更に前記のプランテーション時代に該當する均衡不安定時代即ち人口趨勢の不確實なる時代(一八六〇—一八八〇年)及び外國種の急激なる膨脹期、之れに伴つて土民人口の減少緩和、及び混血人口の加速度的膨脹の二期を経て、最終段階たる各種人口中に於ける競争・協和を基底として新しく成立した漸次的再安定期(一九三〇年以降)となつて、同じく一八五〇年を境に人口現象に著しい變動と動搖とを生ぜしめてゐる。

それ故に大ざつばに分ければ前述した様に安定—動搖—安定の三期とする事が出来、第一期の安定は布哇資源が土民經濟に對應した意味での閉鎖資源時代であつたのに對して、第二期の動搖時代は外部の大きい經濟勢力の圏内に取り入れられて急激なる資本、勞働及び物資の流入に依存した開放資源の時代に入つた。即ち大規模な甘蔗農場

は半奴隸的な移民労働に依存し、従つて其の人口構成も決して安定的形態をとり得ぬものであると共に、外來資本は土地所有權に就いても土民慣習を打破して西歐的土地法律の施行を強制してゐる。然かも此の時代にあつては、一般消費物資も外部から補給せられ、布哇は甘蔗栽培と云ふ純粹に商業的な農業に偏してゐたのである。之れは典型的な植民地經濟である。勿論、此の時代に先立つて先驅的な植民者が來住した頃、即ち一八五〇年以前にあつては、必ずしも商業的栽培の計畫が目前にあつた譯では無かつた。其の時代の特徴としては農業資本の下に多種多様な作物の栽培が目標とせられた。

『初期の布哇在住者は、誠に眞面目であつたが同時に極めて單純な希望を以つて、此の島が農民國として發展する、つまり各人が自分の葡萄樹と無花果樹の下で無事平穩に我が家の生活を暮して行く事の出来る様に經濟上最大の發展をなさしめる事を夢見てゐた。』

世界經濟の要求は布哇をして斯くの如き小作農の樂天地である事を許さなかつた。茲にプランテーションと共に布哇移民労働史が創まるのであるが開放資源初期に於ける労働不足に對しては奴隸的な強制労働、移入労働の歡迎が其の特色となつた。一方大規模な移民奨励と共に他方では農場に於ける苛酷な取締、殊に逃亡に對する極度の警戒等はいづれも此の時期の特徴である。一八六〇年頃のプランテーションの關係者自らが其の當時の労働組織を以て『欺瞞の裡に建てられ、腕力によつて支持された一つの奴隸制度の變型に過ぎない』としてゐる。『クリーリーが到着すると構内の廣場に入れられ、彼等を所望する人々がその人物検査をやり、骨組や齒のよしあし、肺活量の大小等を調べる。クリーリーの方で自分の主人を選ぶ事に出来ない。主人はクリーリー達を他人に譲渡して差支ない。何故かと云へば契約の讓渡とは取りも直さず人間の讓渡であつたから。』是等は正しくプランテーションの一つの型である。

併し此の變動的な段階を経過して第三期の安定化の時期に移つて行く諸現象が生れつゝある。先づ第一に栽培資本の性質である。プランテーション資本は一八六七年には二百萬弗と推察され一八八〇年頃には九百萬弗(内三分の二が米國資本)同九二年には三千二百萬弗で此の内、米國系資本は七四%の二千五百萬弗に上り、英國系資本は六百萬弗に過ぎなかつた。二十世紀の當初には八千五百萬弗の投資額と推算された。之れが一九二九年までの増加を見ると一億五千萬弗乃至は一億七千五百萬弗に及んでゐるが、其の間外來資本の流入は極めて僅かに過ぎないと云はれるが故に、此の増加分は主として地内當業者の餘剰蓄積の再投資によるものと考へられる。つまり資本的に見て、布哇は最早外來資本の必要を見ざるに到つた許りでなく逆に海外投資の必要を見るに到つた。

労働に就いても同様である。プランテーションに必要とする労働力が主として移民労働によつて充足せられつゝある一方、定住労働者の第二世労働力が出現しはじめつゝあり、殊にプランテーション開發の限界に漸く近づきつゝあるに到るや、海外労働に對する需要は緊迫でなくなつた。此の傾向は一九二六年以來見受けられたが、一九三一年は全く其の必要を見ざるに到り、移民の門戸はかくして閉され、應ては資本の場合と同じく労働の海外移出が必要を痛感せられるに到つた。一九二四―三四年の十年間に東洋から布哇に、布哇から本國にと移動した者の數を

比較すると支那人及び支那系の市民では九一一人が、日本人及び日系市民では四一三人が差引にして布哇から本國に移つた事になつてゐる。つまり此の點でも労働に對しても開放資源から閉鎖資源とへの推移がある。

之れと同時に労働組織の全般について強制労働より自由労働への編成替が行はれ、労働關係法規、整備があると共に一般的に生活文化の向上を可能ならしめてゐる。人口構成は漸く正規型に近づきつゝあり、他方、同島内に於ける職業構成の複雑化と併せて地方經濟及び社會の安定化への傾向が漸く濃厚になつて來た。職業構成から見ると、農業を自體に於いても甘蔗栽培が布哇農業の大宗であると云ふ事實は不動としても、近來、栽培農業から多角的自給農業への推移が行はれつゝある事實は見逃し得ない。『野菜、果實、搾乳製酪等の多角的な直接消費作物を、殊にホノルル附近で耕作するといふ方向への推移は土地使用方法の一循環の完成、即ち土民的生活作物から各種の植民地的商品へ、更に再び地方的生活作物へと移つた一循環の完成を示すものである。商業作物の限界耕地を轉じて、今年々輸入されてゐた野菜、果實、製酪、家禽作物等の五百萬弗乃至は少くとも其の一部分にも當る可きものゝ耕作に振り向けようとする可能性が、今日では布哇に於ける各機關の周到な注意を牽きつゝある。』

農業以外の人口が増加する事も當然であつて殊に移民の間にあつて農場以外の労働又は商賣に従事する者が漸次増加して來てゐる。例へば日本人の場合を見るに砂糖栽培業に於ける就業率は指數で示すと一八九〇年の二〇〇から一九三〇年では六五に低落し、同じく農場監督の任にある者は一九〇二年の二一・六から三〇年の一一九・四に増加し、日本人小賣業者の指數は一八九〇年の八から三〇年の一八〇に及び自由業者は同年代に就いて一から八〇に

まで増加してゐる。全般的に見て一八八四年に七二・三%を占めてゐた不熟練及び農場労働者は一九三〇年には五四・二%と減じ、反之、家庭使用人は二・五より七・七%に増加し、書記的勞務に屬する者が三・六%より七・三%に、農民が一・九%より三・二%、熟練・半熟練労働者が一・四%から一六・三%に増加してゐる。

斯くの如き段階は既に再安定期たる第三期に布哇經濟が漸く入りつゝある事を意味するもので、純粹な植民地文化から一つの文明的成熟期に近づきつゝある事を示す。『布哇の開拓期は終つた。人口増加、土地利用、資本労働投下の擴大の頂點は過ぎたやうに見える。布哇群島は一つの安定期に入りつゝある。故に残存の資源及び機會の領域は慎重な計畫に基いて發展せしめらる可きであらう。本島の資源の開発については前よりも一層の、併し一段と健全な開發が將來に豫期されよう。公私の機關が、本島の生活が課する不可避の諸費用と併せて諸制限に就いて痛切に氣がついて來た。故に新しい生活の綱領と計畫とを作成し、之れに照らして事物の相對的價値を發見しようとする爲めに眞摯な努力が行はれつゝある。』つまり布哇社會の安定化の問題と共に其の文明問題が既に取り上げられつゝあるのである。

六

斯くの如くしていづれの場合に於いても地方及び地方經濟の體様は全體の經濟機構に連れて變化して來てゐる。先づ第一に全體的な編成の無い所に「地方」なるものは無いと云つて差支ない。丁度白人入植以前又は入植直後の布哇、或ひはアメリカインディアンと邊疆的接觸を保つた開拓白人の場合の如きがそれである。反之、プランテーション

イン時代の布哇及びインランド・エムパイア地方は立派に全經濟機構の内に編入されて了つてゐるが、唯此の時代にあつては依然として植民地的取扱ひを受け、地方經濟の體様も亦、それ以上に出てゐない。外來資本、外來勞働は勿論の事、其れより生ずる利益や餘剰が土地に必ずしも蓄積されないで——土地の文化・生活的方面の厚生に利用されないで、本國に吸引されて了ふ。勞働にしても定着しないで所謂出稼勞働の段階を脱してゐない。所が此の状態を轉じて次の時期に及ぶと地方經濟として一つの、小規模乍ら完備した形態に整頓する傾向が生じて来る。上述の引用では屢々地方經濟又は文化の成熟と云ふ言葉を以つて表現してゐるが、植民地經濟から脱却して來て、一種の經濟・文化の自立性を持つに到るのである。今日所謂、地方主義又は地方論と云ふのは正さに此の時代に（少くとも此の時代の初期に）該當するものであらう。

斯くの如き事情は交通組織、政治組織又は市場、工場の組織にも其の表現を持つであらうが、更に明瞭な標識として一國の都市分布の體様を以つて之れを説明する事が出来ると思ふ。此の問題は既に昨年開かれた第七回全國都市問題會議への研究報告として發表したものがあつたので茲で詳しく論ずる必要もないと思ふが（第七回總會文獻・研究報告「本邦都市發達の動向と其の諸問題」拙稿「本邦都市發達の傾向と都市體系の整備」参照）其の結論だけを云ふならば、本邦都市の規模及び其の分布に就いて見ると明治初期又は中期のそれが、可なり全國に亘り均衡的に分散せしめられてゐたに對し大正中期の事情は中央集中の最も著しい状態を示してゐる。此の趨勢は依然引きつゞいてはゐるものゝ、現代に於いては所謂、大都市を中心としての都市群を發生せしめてゐる點で大正年代の情勢と異なると共に、之れが更に昨今盛んに主張されてゐる大都市分散、地方都市振興といふ課題に結んで將來の傾向について或る方向を指示してゐる。

或ひは又、各地方事情、地方經濟の編成過程の推移を窺ふとすれば地方都市の興亡を見るのが最も適切である。例へば北海道都市に就いて云へば、全體として觀察する場合、札幌・小樽・函館の様な都市では明治—大正期に於いて最も發達が著しく大正—昭和期にかけては寧ろ發達が低調である。此の事は北海道經濟の發展が前期に著しかつた事を示すものであつて九州の諸都市が此の後期に於いて著しい發達振りを示してゐるのと好個の對照を爲す。殊に北海道都市の各箇について云へば函館の先進性に對して札幌が後進的乍ら、北海道經濟の發展と共に中央都市としての威容を占めるに到つた堅實振りが最も明瞭に現はれてゐる。明治四十一年から大正九年、同九年から同一四年、同一四年から昭和五年、同五年から一〇年に到る四期について各個の人口發達率を見ると、

	一期	二期	三期	四期
札幌	八六・九	四二・〇	一六・七	一一・八
函館	六四・七	一三・二	二〇・三	六・三
小樽	一八・四	二四・四	七・七	六・〇

の如く内地交通の關門としての函館の地位と北海道經濟の中心としての札幌の地位とが年代的にも最も良く示されてゐる。昭和十五年の數字を對照すれば日本經濟そのものゝ變化、之に對應する地方經濟の編成替等が一層明かに

なる事と思ふ。之れ新しき數字の發表を多大の期待を以つて待望する所以である。

以上を以つて本稿を終らうと思ふ。盡さざる所、頗る多い様であるが、云はんとする趣旨は一應明かになつたと思ふ。そして國土計畫論を云々する場合、それが當然地方經濟再編成の問題となるが故に、地方資源及び地方經濟の時代的社會的意義を深く究めなければならぬといふ點を強調したい。同時に東亞國土計畫の如き大規模な計畫を問題とする場合、遠隔の外地を「地方化」するに當つて心得ねばならぬ條々は直接間接、本稿の内に示されてゐると思ふ。國土計畫は(内外いづれにせよ)經濟・文化の問題であると同時に政治の問題である事も忘れてはならない。

吾國に於ける勞働移動の研究

——特に先きの歐洲大戰當時の勞働移動現象に就いて——

藤 林 敬 三

内 容

- 一 本論の意圖
- 二 勞働移動に關する若干の基本的考察
- 三 先きの歐洲大戰時に於ける吾國勞働移動の概況
- 四 當時の勞働移動現象に關する分析的考察
- 五 本論の摘要と結語

日支事變の開始以後、吾國の戰時經濟の進展と共に、漸次痛感せられるに至つた勞働力の質及び量の不足は、勞働生産性の増大のための諸種の國家的勞働者政策の實施を必要とした。そしてこの國家的勞働者政策の目的は一面勞働生産性の低下を防止し、他面勞働生産性の増強を意圖するにあることはむろんである。